

## 人文主義者のナチズムに対する協調 ——リヒャルト・ハルダーの場合——

曾 田 長 人

### はじめに

ギリシア・ローマ古典古代（特に古代ギリシア）がナチズムの思想・行動の一つの根であった<sup>1)</sup>ことは、ドイツの「過去の克服」の本格化と並行して次第に注目を浴びてきた。1930年代から第二次世界大戦終了にかけてのドイツの人文主義<sup>2)</sup>者（主に古典文献学者、古代史学者、古典語教師を指す）は、ナチズムに抵抗、傍観から協力に至るまで様々な態度を取った。人間性の擁護を謳う人文主義者に、なぜ人間性の蹂躪に至るナチズムと響き合う余地があったのだろうか。こういった疑問から著者は、ドイツ第三帝国（以下、第三帝国と略）における人文主義者とナチズムの関わりを思想的・社会的な背景、両者の関わりの方、両者の関わりに対する第二次世界大戦後の捉え方などに関心を抱くに至った。その結果、「人文主義者とナチズム——その抵抗・傍観・協調の類型をめぐる考察」を開始した<sup>3)</sup>。

最初に、この研究テーマの方法と狙いについて述べておきたい。著者は、ドイツ第三帝国における代表的な人文主義者のナチズムに対する関わりを、抵抗、傍観、協調という三つの類型に大別した<sup>4)</sup>。第三帝国およびその前後の時代における彼らの言行に関しては、すでにドイツを中心に多か

---

1) その代表は、第三帝国におけるスパルタの受容である。これについては、拙論「ドイツ第三帝国におけるスパルタの受容（1）」（東洋大学経済研究会『経済論集』、2017年、第43巻第二号）pp.199-224、拙論「ドイツ第三帝国におけるスパルタの受容（2）」（東洋大学経済研究会『経済論集』、2018年、第44巻第一号）pp.1-30を参照。

2) 「人文主義Humanismus」とは、多義的な概念である。本論において人文主義とは、「ギリシア・ローマ古典古代との取り組みを通して、人間や文化の形成を目指す運動」として理解する。

3) 平成29年度科学研究費助成金、基盤研究C、課題番号17K02265。

4) 代表的な人文主義者のそれぞれが、純粹に上で挙げた類型に収斂するものではない。協調の類型に分類した人文主義者が抵抗の言行を示し、傍観の類型に分類した人文主義者が協調の言行を示したことなどもあった。上で述べた類型の分類が実際には異なる類型への偏差を含むものであったことを、予め断ってお

れ少なかれ研究が行われている。それゆえそれらの先行研究を参考とする。しかしそれに留まらず、彼らの書簡、遺稿（未発表の〔講演〕原稿など）という一次資料に至るまで、研究の対象を広げた。重要な記録が、こうした未刊行の書簡、遺稿に含まれている場合があるからである。20世紀ドイツの著名な人文主義者の書簡、遺稿は戦災などで失われた場合があるものの、欧米（主にドイツ）の公共図書館や大学資料館に、おおむね良い状態で保存されている。資料や文献の読解に際しては、20世紀前半の人文主義を取り巻く状況、思想的・社会的な状況を踏まえた上で、上述の三つの類型を代表する人文主義者それぞれの出自・経歴、研究上のテーマと関心、彼らによるナチズムへの関わりなどの具体的なあり方、第二次世界大戦後の彼らの言行などを検討する。かかる検討によってドイツ・ヨーロッパの重要な文化的伝統である人文主義の明暗を思想史的な視座から明らかにすることが、本研究の目的である。

本論文は上で述べた研究の一環であり、ナチズムへの協調を示した人文主義者の一人としてリヒャルト・ハルダー（Richard Harder）を考察の対象とする。彼は20世紀ドイツを代表する古典文献学者の一人であり、晩年に著した「ギリシア人の固有性」「ギリシア文化入門」という二つの著作<sup>5)</sup>には、彼の広い学識、深い洞察がいかに発揮されている。そういった彼が、なぜナチズムとの協調に至ったのか。論述の順序は、以下のとおりである。第一章においては、ハルダーの出自と経歴について整理する。第二章においては、彼の研究上のテーマと関心について考察を行う。第三章においては、ハルダーによるナチズムとの関わりなどの具体的なあり方を検討する。第四章においては、第二次世界大戦後の彼に関する考察を行う。

## 第一章 ハルダーの出自と経歴<sup>6)</sup>

ハルダーは1896年、北フリースラントのテーテンビュルに生まれた。父方の祖父と父は、ルター派プロテスタント教会の牧師であった。キールの学識学校に通い高校卒業資格を得た後、ハイデルベルク大学で1914年の夏学期、神学を学んだ。第一次世界大戦に際して当初は看護兵、後に兵士として従軍した。しかし戦場で負傷し、軍務から解かれた。同大戦の終了後、専攻を古典文献学に変え、キール大学で古典文献学の教鞭を執っていたヴェルナー・イエーガー（Werner Jaeger）に

---

く。

5) Harder, Richard: *Eigenart der Griechen, Einführung in die Griechische Kultur*, hrsg.v.Walter Marg, Freiburg im Breisgau 1962. (リヒャルト・ハルダー『ギリシアの文化』[松本仁助訳、エンデルレ書店、1965年])

6) 以下の説明は、主にHelmig, Christoph: Harder, Richard, in: *Der Neue Pauly. Enzyklopädie der Antike*, Bd. 14, hrsg. v. Manfred Landfester, Stuttgart 2003, S.531f. Schott, Gerhard: Richard Harder, *Klassischer Philologe, Erster Interpret der Flugblätter der »Weissen Rose«, und das »Institut für Indogermanische Geistesgeschichte«*, in: *Die Universität München im Dritten Reich. Aufsätze. Teil II*, hrsg.v.Elisabeth Kraus, München 2008, S.417-419による。

師事した。1921年イエーガーがベルリン大学へ招聘されると、ハルダーもイエーガーの後を追って1922年ベルリン大学へ移った。そして1924年イエーガーの下で、博士の学位を取得した。1927年にはハイデルベルク大学のオットー・レーゲンボーゲン (Otto Regenbogen) の下で、教授資格を得た。同年ケーニヒスベルク大学へ、古典文献学の教授として招聘された。ハルダーが学者として幸先の良いスタートを切った背後には、彼の師匠イエーガーによる支援のあったことが推測されている<sup>7)</sup>。翻ってイエーガーにとってハルダーは、最初の弟子であるだけでなく将来を嘱望するという意味での一番弟子でもあった。

1930年夏学期ハルダーはキール大学へ移った。1939年キール大学から研究休暇を得て、ギリシアにおいて碑文研究に従事した。第二次世界大戦が勃発するとドイツ国防軍に召集され、1940年10月まで西部戦線に兵長として従軍する。1941年5月ミュンヘン大学へ赴任し、同時に「インドゲルマン精神史研究所」(以下「精神史研究所」と略)での作業を認められた。本研究所は、ナチ政権の世界観政策と密接に関わった「ローゼンベルク機関 Amt Rosenberg」との連携下にあった。

第二次世界大戦後の非ナチ化審査においてハルダーは「同調者」と判定され、教職から退いた。ただし出版活動は許されたので、隠遁先のバイエルン、シュタルンベルガー湖畔ポッセンホーフェンで、ギリシア・ローマ古典古代等に関する著作や翻訳に勤しんだ。1952年にはミュンスター大学から招聘され、同大学の古典文献学科の教授に就任する。しかし赴任当時から、健康状態は思わしくなかった。1957年、彼はスイスのヴァンドゥーヴルで開かれた「古典研究を支援するハルト財団」の大会に参加した。この大会からの帰途9月3日から4日にかけての夜、チューリヒ駅において一人で電車を待っている間に心臓発作を起こし、翌朝亡くなっているのが見つかった。

## 第二章 ハルダーの研究上のテーマと関心

本章においては、ハルダーがナチ政権の施策と直接的に関わる1941年より前の時期を対象として、彼の研究上のテーマと関心を検討する。この問題を検討するに先んじて、19世紀から20世紀初期に至るドイツの人文主義的な古典語教育・古典研究をめぐる状況を、振り返っておきたい。

19世紀初期に制度化され、ドイツの国家や文化の形成に重要な役割を演じた人文主義的な古典語教育・古典研究は、20世紀初期に至って危機に陥りつつあった。危機の外的な要因として、人文主

---

7) Mensching, Eckard: "...gehört zu den wenigen, die zur bedingungslosen Reue fähig waren." Zwei Texte über Richard Harder und ein Hinweis auf F. Schachermeyr, in: Latein und Griechisch in Berlin und Brandenburg, Jg. XLIV/Heft 3, 2000, S.80.レーゲンボーゲンはイエーガーの盟友であった。ハルダーの博士論文は、イエーガーが後身の育成のために創刊した『新しい文献学的研究』創刊号に掲載された。イエーガーは1936年アメリカへ移住したが、師弟の交流は第二次世界大戦の間を除いて、ハルダーの死に至るまで続く (s. a.a.O., S.91-95. Schott, G.: a.a.O., S.419, 469f., Calder III, William M.: Werner Jaeger and Richard Harder, an Erklärung, in: Quaderni di storia 17, 1983, pp.99-121.)

義に対する批判の高まりが挙げられる。この批判を背景として、人文主義ギムナジウムは古典語の授業時間数の段階的な削減を強いられ、その卒業生による大学入学資格の独占を1900年に放棄した。危機の内的な要因として、歴史学的な古典研究の進展が挙げられる。これによってギリシア・ローマの古典性は相対化を蒙った。にもかかわらずウルリヒ・フォン・ヴィラモーヴィッツ＝メレンドルフ (Ulrich von Wilamowitz-Moellendorff) のような指導的な古典文献学者は、歴史学的な研究に無反省に依拠し、古典語教育の退潮に関心を持たなかった。野蛮な様相を呈した第一次世界大戦は、ヨーロッパ文明の進歩に対する信仰を揺るがした。人文主義が依拠した人間性といった価値も、多くの人にとって信憑性を失った。

このような人文主義を取り巻く内外の危機から、1920年代のドイツにおいて「第三の人文主義」と後に呼ばれる古典復興の精神運動が生まれた<sup>8)</sup>。その中心となったのは、イエーガーである。彼は「人文主義は無条件に政治的な出来事である」<sup>9)</sup> ことを諷い、<sup>バイデリア</sup>教育という概念へ注目することによって、古代ギリシアの新たな古典性の立ち上げを試みた。この試みは、教育と(国家)共同体形成との相互作用を精神的に描くイエーガーの大著『バイデリア ギリシアにおける人間形成』<sup>10)</sup>に結実する。これによってイエーガーは、分離しつつあった古典語教育と古典研究の架橋を試みた。同時代のヴァイマル共和国の文教体制にあって、人文主義的な古典語教育・古典研究は以前にまして周縁化しつつあった。しかしイエーガーは人文主義的な古典語教育・古典研究の同時代の文化、社会に対する意義を、「古代文化協会」の設立、同協会の機関紙『古代』や書評誌『グノーモン』の創刊、講演や啓蒙的な文章の新聞・雑誌への発表などを通して訴えた<sup>11)</sup>。

以上の状況を踏まえ、1941年までのハルダーの著作をⅠ.ギリシア・ローマの精神史に関わる研究、Ⅱ.人文主義的な古典語教育・古典研究の重要性を訴える言行、Ⅲ.ナチ政権の成立に直接、触発された文章という三つのグループに分けて考察してゆく。

## Ⅰ. ギリシア・ローマの精神史に関わる研究

ハルダーの博士論文『オケルス・ルカヌス テキストと注釈』(以下『オケルス・ルカヌス』と略)は、ピュタゴラス派の哲学者オケルス・ルカヌス (Ocellus Lucanus) による「万物の本性につ

---

8) これについては、拙論「ヴェルナー・イエーガーの第三の人文主義と、その根源」(東洋大学経済研究会『経済論集』、2014年、第40巻第一号) pp.127-150を参照。

9) Jaeger, Werner: Die geistige Gegenwart der Antike, in: Humanistische Reden und Vorträge, Berlin<sup>2</sup>1960, S.162.

10) 翻訳は、ヴェルナー・イエーガー『バイデリア ギリシアにおける人間形成』(上)(拙訳、知泉書館、2018年)を参照。

11) 拙論「ヴェルナー・イエーガーの第三の人文主義と、その根源」同上、pp.137-139.

いて<sup>12)</sup>を考察の対象としている。ハルダーはこの作品の15世紀と16世紀に成立した18の手稿を比較校合し、原典テキストの存在を措定し、原典テキストからの写本の派生関係を古代におけるテキストの歴史（ヘレニズムの伝統、新プラトン主義によるルネサンス、ギリシア共通基語への翻訳）、近代の版に分けて整理し、テキストの復元と注釈を行っている。そして「我々にとってある意味でオケルスの本は、前2世紀の逍遥学派にピュタゴラス主義の潮流が存在したことを証している<sup>13)</sup>と結論する。『オケルス・ルカヌス』は、ハルダーが「ヘレニズム哲学という土壌で信頼のおける本文批評家、校訂家、解釈者であることを示した<sup>14)</sup>。

彼の教授資格請求論文「キケロ「スキピオの夢」について」（以下「スキピオの夢について」と略）は前作から精神的な関心を継承し、「いかにキケロがヘレニズム期の学派伝統に由来する自由に用いられた要素を、プラトンの精神に基づいて新たな統一へと融合したか<sup>15)</sup>論じたものである。本論においては、ギリシアの精神史のローマへの継受のみならず、「第三の人文主義」の影響つまり哲学（学問、教養）と政治との関わりという問題が現れている。

「スキピオの夢について」が考察の対象としている「スキピオの夢」は、キケロ『国家論』の主に第六巻からマクロビウス (Macrobius) が別個に伝承した作品である。ハルダーは「スキピオの夢」に関心を抱いた理由として、この作品にキケロの哲学観が窺われるからであるとしている<sup>16)</sup>。そして「歴史的な分析」、「語りと対話」、「ローマ人による模範像」、「プラトンという模範の影響と変化」について検討した後、最終章「プラトン主義と政治」において次のように述べる。

「キケロは自らがプラトン主義者であると感じており、それによって現実政治との対立的な緊張関係に立っている。執政官の職に<sup>コンスル</sup>出馬するあの奇妙な覚書の中で彼の兄弟は、キケロがプラトンに帰依する確信は、政治を<sup>実践</sup>する急務の中で内的な障害であると時折、語っている。（中略）しかし『国家論』に描かれた国家の計画は、挫折し成功しなかった政治家によるものである。（中略）（スキピオの）夢は、本来の宗教を含んでいない。というのも、この夢はそれほど確信に溢れていないからである。というわけで、半ば宗教的と名付けるべき内面性に育まれた

12) περι της του παντός φύσεως

13) Harder, Richard: 'Ocellus Lucanus'. Text und Kommentar, Berlin 1926, S.153.

14) Schadewaldt, Wolfgang: in: Gnomon. Kritische Zeitschrift für die gesamte klassische Altertumswissenschaft, Bd.30, 1958, S.74. s. Theiler, Willy: Ocellus Lucanus. Text und Kommentar von Richard Harder, in: Gnomon. Bd.2, 1926, S.585-597.

15) Schadewaldt, W.: a.a.O., S.74.

16) Harder, Richard: Über Ciceros Somnium Scipionis (1929). in: Kleine Schriften, hrsg.v.Walter Marg, München 1960, S.354.

プラトン主義が残る。(中略)しかし実践的な政治家、首尾一貫した思想家がこうした夢を嘲笑するにせよ、ギリシア的な精神性とローマ的な国家性を、個人的で分裂してはいるが、影響力のある実り豊かな仕方<sup>17)</sup>で結合する志操が、この作品(「スキピオの夢」)の中で生きている。」<sup>17)</sup>

上述の引用部の歴史的な背景について補足すると、プラトンは『国家』において理想国家のモデルを描いた。しかしそのモデルを実現する試み、すなわちシチリアの僭主ディオニュシオス2世への献策は受け入れられなかった。キケロはプラトンに私淑してローマ共和制の末期、執政官<sup>コンスル</sup>その他としてローマの共和制の改革に努めた。しかしその試みはプラトンと同様おおむね失敗し、キケロ自らの理想国家を描く『国家論』、その哲学的なエッセンスとも言える「スキピオの夢」が著作として残った。ここから、上の引用における「現実政治との対立的な緊張」という表現が理解できる。こうしてハルダーは、キケロの「スキピオの夢」をプラトン主義のローマにおける受容という観点から捉え、キケロによる哲学と政治の媒介が中途半端に終わった限界を指摘しつつも、「ギリシア的な精神性とローマ的な国家性を結合する志操」を「第三の人文主義」の影響下、高く評価している。

「ローマにおける哲学の定着」(1929年)も、前作と似た問題圏を扱っている。剛毅を重んじるローマにおいては、伝統的に哲学に対する反感が存在した。にもかかわらずハルダーによれば、ローマのスキピオ・サークルの周辺でギリシアの教養が受容された結果、「[人間性 *humanitas*]」はその後、ギリシアの教養のローマにおける合言葉になった<sup>18)</sup>。その際に人間性の内容をなした寛恕と雅量は、ローマ人にとって古くから伝承された祖先の徳でもあったという<sup>19)</sup>。(小)スキピオのようなタイプの人にとって教養と哲学は、政治の重荷と骨折りに対する望ましい対抗力になった<sup>20)</sup>。そして「キケロの教養人としての内的な繊細さと不安定さは、当然、自らの政治的な迫力と行動能力を弱めた。にもかかわらず、彼が全身全霊を挙げて依拠する古代ローマの伝統がゆえに、彼は失敗にもかかわらず繰り返し国家の業務と携わらざるを得なかった」<sup>21)</sup>。「人間性への補遺」(1934年)においても、ハルダーは(ルドルフ・プファイファー [Rudolf Pfeiffer] の批判に応じて)ローマにおける人間性という理念がギリシアに端を発すること、この理念がローマ古来の「寛恕 *clementia*」という徳を活性化した<sup>22)</sup> ことなどについて、改めて考察を行っている。

ハルダーはすでに1920年代の後半、新プラトン主義の哲学者プロティノスの作品の翻訳を発表し

---

17) A.a.O., S.394.

18) Harder, Richard: Die Einbürgerung der Philosophie in Rom (1929), in: Kleine Schriften, a.a.O., S.339.

19) A.a.O., S.340.

20) A.a.O., S.351.

21) A.a.O..

22) Harder, Richard: Nachträgliches zu *humanitas*, in: Kleine Schriften, a.a.O., S.412.

ていた<sup>23)</sup>。1930年からハルダーはプロティノスの作品の校訂と翻訳を本格的に引き受け、これは彼の学者としての最も優れた業績とされている<sup>24)</sup>。「実際に（ハルダーによる）プロティノスの作品の翻訳は、数多くの箇所解釈や校訂を通して、プロティノスの思想の理解に達した。プロティノスの思想の曖昧な箇所は、ハルダーによる精神的な取り組みによって初めて明らかになった」<sup>25)</sup>。

こうしてハルダーによるギリシア・ローマの精神史への関心は、プラトン主義を核としていた。そして彼によるプラトン主義への関心は、一方ではローマのキケロによる人間性という理念の確立とその政治的な現実化へ向けた受容、他方ではプロティノスによるその哲学的・精神的な純化へ向けた受容という二つへ分岐したと考えられる。修業時代のハルダーが腕を磨いた文献解釈の技術は、後に思わぬ場でその助力を要請されることになる。

## II. 人文主義的な古典語教育・古典研究の重要性を訴える言行

第二章の冒頭において、イエーガーが人文主義的な古典語教育・古典研究の重要性を訴えるため精神的な活動を行ったことに触れた。彼の弟子ハルダーも大学への就職後、師と同様、しかし師とは異なりラジオ放送という新たなメディアも通して、同様の活動を繰り広げることとなる。

ハルダーは1928年「古代とドイツの民族共同体」<sup>26)</sup>と題する文章を、「ケーニヒスベルク一般新聞」に発表している。彼は冒頭で、帝国裁判所長官かつ外務大臣ヴァルター・ジーモンズ（Walter Simons）による同名の演説に触れる。そしてジーモンズが、若者に人文主義が縁遠くなったことを嘆くのに対して、ハルダーは「にもかかわらず冷静に考察するならば、人文主義の見通しは今日、かつてないほど好都合であると判断して構わない」と説く。その理由としてドイツにおいて人文主義は国家の保護を失い内的な堅固さと豊かさを頼りにせざるを得ず、欧米各国で古典復興の機運が熟している点を挙げる。つまり逆境をチャンスとして捉えるべきことを主張する。

東プロイセン・ラジオ（Ostmarken Rundfunk）で行った「生きた現代の力としての古代」（1930年）という講演においてハルダーは、古典教養はキリスト教と同様に生きた力を奪われ、死を宣告されていると警告する。これに対して彼は、古代という精神的な宝がドイツ国家、特にプロイセ

---

23) Plotin: Der Abstieg der Seele in die Leibeswelt, in: Die Antike. Bd.1, 1925, S.363-376. Plotin: Schrift gegen die Gnostiker, in: a.a.O., Bd.5, 1929, S.53-84.

24) Plotin: Schriften, übersetzt (in chronologischer Reihenfolge) von Richard Harder, Bd. 1-5. Leipzig 1930-1937.

25) Schadewaldt, W.: a.a.O., S.75.

26) Harder, Richard: Antike und deutsche Volksgemeinschaft, in: Königsberger Allgemeine Zeitung, Nr.301, 29.6.1928.

ンによって培われてきたことを指摘する<sup>27)</sup>。キールでの公開講演「ギリシアの教養理念」<sup>28)</sup>(1931年)においてハルダーは、ギリシアの教養が原理的な危機に瀕していると指摘する。その例として教養(人)や古典への批判、教養への嫌気、文化よりも経済や政治の重視などを挙げる。彼はこうした趨勢を嘆き悲しむのではなく、これに能動的に立ち向かうべきことを説く。そしてギリシアの教養と現代ドイツ人の結び付きを強調する。

以上の二つの講演においては、ギリシアとドイツ人、古典教養と国家の絆が前提されている点に注目すべきである。

「古典文献学における研究の問い」(1931年)は、人文主義的な古典語教育・古典研究が学校と大学において直面している課題について分析したものである。ハルダーは、「我々にとって学問の力は、まさに自らの働きかける教育力の中にある」<sup>29)</sup>と説き、学者も教育の問いに携わるべきであると主張する<sup>30)</sup>。こうして学問と教育の結び付きに言及することからも、ハルダーが「第三の人文主義」の影響圏内にあったことが理解できる。

以上で取り上げた新聞記事や講演や論説に加えて、彼は同時代の文教改革や人文主義的な古典語教育・古典研究に関する五つの書評を著している<sup>31)</sup>。このように彼は、人文主義的な古典語教育・古典研究の制度的な維持に強い関心を抱いていた。

### Ⅲ. ナチ政権の成立に直接、触発された文章

ヴァイマル共和国の文教政策は、人文主義的な古典語教育・古典研究に深い理解があったとは言いが難かった。これに不満を抱いていた人文主義者の多くは、1933年のナチ政権の成立を歓迎し

---

27) 「国家の傍ら、そして国家の中に教会、政党、宗教的で政治的な信仰告白、経済とその代表者の力とイデオロギーその他、多くが存在します。ここでは、仮借ない戦いが問題となっているように見えます。国家にどの程度、自らの正しさを前述のあらゆる他の力に対して守り、増やすことがうまくゆくかということは、我々の未来の最も重要な問いの一つでしょう。こうした取り組みにおいて国家の精神的な武器として残るのは、人文主義の理念に他なりません。」(Harder, Richard: Die Antike als lebendige Gegenwartsmacht, Vortrag Ostmarken-Rundfunk, 2.3.1930 und 7.3.1930, S.9 [unveröffentlicht], in: Nachlass von Richard Harder Ana 651 in der Bayerischen Staatsbibliothek.)

28) Harder, Richard: Die griechische Bildungsidee. Öffentliche Vorlesung, Kiel Sommer-Semester 1931 (unveröffentlicht), in: Nachlass von Richard Harder, a.a.O..

29) Harder, Richard: Studienfragen in der klassischen Philologie, in: Neue Jahrbücher für Wissenschaft und Jugendbildung, Bd.7, 1931, S.97.

30) A.a.O..

31) Marg, Walter: Bibliographie, in: Kleine Schriften, a.a.O., S.503.



た<sup>32)</sup>。それを表すのは、新政権が人文主義へ理解を示す期待を文章で公にしたイエーガーである<sup>33)</sup>。ドイツ古典文献学者協会の綱領も、ナチ政権のイデオロギーに沿ったものへと一部、書き換えられた<sup>34)</sup>。ハルダーも、こうした一般的な陶酔状態に巻き込まれた。これを示すのは、彼が1934年に公にした以下の三つの文章である。

第一に、ハルダーはハイデッガーのフライブルク大学学長就任演説「ドイツ大学の自己主張」に対して好意的な書評を著した。周知のようにこの演説は、ハイデッガーによるナチズムへの賛同表明として受け取られたものである。ハルダーは、ハイデッガーの演説が(ソフィストが理想とした)「演示的epidektisch」ではなく、「助言を与えるsymbleutisch」性格を持つことを讃えている<sup>35)</sup>。その際ハイデッガーが古代ギリシアへ回帰することを評価し、プラトン主義と同一視されたギリシアの思想がヨーロッパ、特にドイツとイギリスを動かし強めた時期があったことを特筆している<sup>36)</sup>。

第二に、ハルダーがプラトン『クリトン』の翻訳に付した後書が挙げられる。ハルダーはこの後書においてドイツにおける政治的なプラトン像の成長を、「(第一次)世界大戦という偉大な現実と共同体の経験、(中略)ドイツ人による国家と民族へ向けた努力」<sup>37)</sup>に帰している。なぜハルダーが『クリトン』へ注目するかというと、「この小対話編におけるほど、プラトンによる国家と民族への結び付きが彫塑的な形態と説得力のある言葉に化したことはないからである」<sup>38)</sup>。後書の最後の注でハルダーは、「最後に私はここ(『クリトン』の後書)で示唆された認識が、この(ナチスが政権を獲得した1933年という)政治的な年を生きたことに負うと言わざるを得ない」<sup>39)</sup>と断っている。

第三に、上述の『クリトン』後書との関連の下、ハルダーがトリーアで開かれた第58回文献学者会議において行った講演「プラトンとアテナイ」が挙げられる。この講演の冒頭でハルダーは、プラトンとの取り組みがアクチュアルであることを述べる<sup>40)</sup>。その際にハルダーは、「後の種族を政治

---

32) s. Humanistische Bildung im nationalsozialistischen Staate, Berlin 1933.

33) Jaeger, Werner: Erziehung des politischen Menschen und die Antike, in: Volk im Werden, Bd.1, 1933, S.43-49.

34) Deutscher Altphilologenverband: 'Die Gegenwartsbedeutung des deutschen Gymnasiums', in: Das humanistische Gymnasium, Bd.44, 1933, S.209-211.

35) Harder, Richard: Martin Heidegger. Die Selbstbehauptung der deutschen Universität, in: Gnomon, Bd.9, 1933, S.440.

36) A.a.O., S.441.

37) Harder, Richard: Platos Kriton, in: Kleine Schriften, a.a.O., S.224.

38) A.a.O., S.225.

39) A.a.O., S.246.

40) 「(プラトンによる) 国家に関する教説、国家の施設、ギリシアの思想家による措置は、幾つかの観点で似た状況に立っている今日のドイツに、プラトンと取り組み、(彼と自らを) 比較するよう促します。(中略) この(プラトンという) きわめて豊かで堅固で精神力がある、我々の種族の国家的な思想家は、我々と内的に似通っています。」(Harder, Richard: Plato und Athen, in: Neue Jahrbücher für Wissenschaft und

に関して前向きで豊かにするのは、時代状況との戦いという戦術的な必要よりも、むしろ政治の世界観的な基礎です。(中略) 不変の価値を備えるのは、プラトンの政治的な営みが失敗したことでなく、プラトンがあらゆる政治の必然的な意味として真の国家、真の政治的な人間の永遠の像を明らかにしたことです<sup>41)</sup>と説く。ハルダーによれば、「真のアテナイは法、都市の協同精神の中に生き<sup>42)</sup>、その発露としてマラトンの戦いで勝利を挙げる。「(ペルシア戦争での勝利という) 戦う民族の英雄的な業績は、自らの国制に基づきます。この国制は、自らの人種の純粋性に基づきます<sup>43)</sup>。アテナイで実現した法の平等は、血の平等の必然的な結果であったという<sup>44)</sup>。

「プラトンとアテナイ」に関して「ハルダーが自らのプラトン解釈に当てはめた(人種や世界観といった)図式は、ギュンター<sup>45)</sup>とローゼンベルクの流儀による古代史の短絡的な解釈に他ならず、(中略)(この講演には)ドイツの大学教授が党政治上の顧慮から自らの学問の新解釈を試みたか、という初期の例が現れた<sup>46)</sup>」ことが指摘されている。

以上Ⅲにおいて検討した三つの作品に共通しているのは、プラトンへの高い評価を伴っていることである。本章のⅠにおいては、ハルダーによるギリシア・ローマの精神史に関わる研究がプラトン主義を一つの核としていたこと、Ⅱにおいては、ハルダーがヴァイマル共和国下、人文主義的な古典語教育・古典研究の存続に危機感を覚えており、その重要性を訴えるため活発な言行を繰り広げたことを述べた。他方ドイツにおいては1930年代から、ナチズムのイデオロギーに沿ったプラトンの政治的な解釈<sup>47)</sup>が広まりつつあった。こうした内外の状況からハルダーが、第三帝国における人文主義的な古典語教育・古典研究の存続を考える際、プラトンに注目したことに不思議はない。その際プラトンは、人間性よりもむしろ人種主義という観点から捉えられるに至ったのであった。

---

Jugendbildung, Bd.10, 1934, S.484.)『小著作集』収録の本論ではこの引用箇所など冒頭の部分が省略されているので、以下、初出の雑誌から引用する。

41) A.a.O..

42) A.a.O., S.497.

43) A.a.O., S.498.

44) A.a.O..

45) Günther, Hans F.K..1891-1968年。人種理論を奉じた優生学者。第三帝国の時代、大きな影響を及ぼした。

46) Apel, Hans Jürgen/Bittner, Stefan: Humanistische Schulbildung 1890-1945. Anspruch und Wirklichkeit der alttumskundlichen Unterrichtsfächer, Köln/Weimar/Wien 1994, S.282.

47) s. Orozco, Teresa: Die Platon-Rezeption in Deutschland um 1933, in: "Die besten Geister der Nation". Philosophie und der Nationalsozialismus, hrsg.v.Ilse Korotin, Wien 1994, S.141-185.

### 第三章 ハルダーとナチズムとの関わり

本章においては1941年から1945年にかけてのハルダーとナチズムとの関わりを、Ⅰ.「精神史研究所」の設置、Ⅱ.「精神史研究所」における活動、Ⅲ.「白バラ」配布文書の鑑定、という三つに分けて検討してゆく。「精神史研究所」へハルダーが赴任したことは、第二次世界大戦後、彼がナチズムとの関わりがゆえに非難される主たる理由となった。

ハルダーとナチズムとの関わりは、ヴァイマル共和国の末期に遡る。1930年キールで開かれたバッハ祭において、当地のナチ・ドイツ学生連盟がキール大学教授で左派のプロテスタント神学者オットー・バウムガルテン (Otto Baumgarten) を公の場で誹謗し罵倒する、という事件が発生した。ハルダーはキール大学への赴任早々年上の同僚をかばい、「ドイツ一般新聞」に「人倫の野蛮化」と題する記事を掲載した。その中で彼はこの騒擾を、学生のモラルの低下を示す由々しき事態として批判した。ハルダーは「礼儀正しいドイツ人は皆、こうした (ナチ・ドイツ学生連盟の学生による) 行いを非難しなければならない。世論は差し迫る野蛮化を、エネルギーな全員一致の“止めよ”によってのみ防ぐことができる」<sup>48)</sup>と説いたのである。こうした野蛮化を諷める点には、人間性を重んじ、人間を獣に近い存在から神に近い存在へ教化すべきことを説いた人文主義者の面目が躍如としている<sup>49)</sup>。

上述の記事が掲載されて以来、ハルダーはナチスから彼らの敵と見なされた。1933年にナチ政権が成立した後、「職業官吏再雇用法」が施行され、ユダヤ系、反体制的と見なされた公務員が、人種上、政治上の理由に基づいて解雇された。キール大学の自由学生連盟は、ユダヤ系および彼らが反ナチと見なした25名の教員の解雇を同大学に要求した。この25名の中に、ハルダーの名前も含まれていた。しかし第二章「Ⅲ. ナチ政権の成立に直接、触発された文章」に現れた、変わり身の早さが評価されたためか、ハルダーは解雇を免れた<sup>50)</sup>。彼はその後しばらくプロティノス研究に打ち込み、時事的な文章の発表をおおむね控えるに至る。のみならず1934年には突撃隊(SA)、1937年にはナチ党、1938年にはナチ教員連盟に加入している<sup>51)</sup>。しかし他方で彼は1926年から1937年にかけて『グノーモーン』の編集責任者 (1938年から1944年までは編集者の一人) として、学問研究の中立性を保つことに努めた。すなわち彼は人種的あるいは政治的な理由で亡命を余儀なくされた (ユダヤ系の) ドイツ人にも同誌に書評を書く場を開き<sup>52)</sup>、同誌を国際的な名声を備える雑誌へ高め

---

48) Harder, Richard: Sittenverwilderung, in: Deutsche Allgemeine Zeitung Berlin, Jg.69, Nr. 471, 9.Oktober 1930.

49) 注127を参照。

50) Marg, Walter: Nachwort, in: Kleine Schriften, a.a.O., S.480.

51) Schott, G.: a.a.O., S.460f.

52) 1941年にハルダーが「精神史研究所」へ赴任する際も、ナチ教員連盟からこの過去を咎められた (s. Schott, G.: a.a.O., S.418f., 461)。

ることに貢献したのである<sup>53)</sup>。

## I. 「精神史研究所」の設置

次に「精神史研究所」を設置する経緯へ移りたい。

19世紀以降、比較言語学、歴史言語学研究の進展によって、ヨーロッパ、西アジアの様々な言語が共通のインドゲルマン祖語から派生したことが認められつつあった。他方ドーリア人が前1200年頃から前1100年頃にかけて北方からギリシア本土へ移住したことが、すでに知られていた。「言語が共通の根源に由来したということは、人種も共通の根源に由来したということ、前者に劣らず明白かつ明晰に推測させた」<sup>54)</sup>だけではない。こうした仮説が「ドーリア人の移住」と結び付けられた。すなわち（東方のオリエントに代わって人類の揺籃の地とされた）北方の、戦闘的で創造的なアーリア（インドゲルマン）<sup>55)</sup>人が南下し、ギリシア・ローマを初めとする人類の高い文化を生み出したという<sup>56)</sup>。彼らの文化は、インド、イラン、ペルシアなどにも及んだとされた。しかし彼らの文化を阻む敵対勢力が存在し、それを代表するのが（インドゲルマン語族と異なるセム語族に属する）ユダヤ人であるという<sup>57)</sup>。「インドゲルマンのあらゆる文化が北方に由来することは、もはや仮説の領域に属することなく、（第三帝国において）国家ドグマたる位置付けを得た」<sup>58)</sup>。

第三帝国においては学問政治の新たな推進機関として、「ドイツ古代遺産協会」と「ローゼンベルク機関」が設けられた。これらの機関は研究所の設立などを通してナチ的世界観の学問的な正当化、普及に努めた。「ローゼンベルク機関」の目標は、ナチズムの理念に拠る党大学である「高等学院 Hohe Schule」の設立にあった。それによってローゼンベルクは自らの『20世紀の神話』に基

---

53) Wolf, Ursula: Rezensionen in der Historischen Zeitschrift, im Gnomon und in der American Historical Review von 1930 bis 1943/44, in: Antike und Altertumswissenschaft in der Zeit von Faschismus und Nationalsozialismus, hrsg.v.Beat Näf, Mandelbachtel 2001, S.428-432. Schott, G.: a.a.O., S.436f.

54) Chapoutot, Johann: Der Nationalsozialismus und die Antike, aus dem Französischen Walther Fekl, Darmstadt 2014, S.36.

55) アーリアは主として人種上、インドゲルマンは主として言語学上の概念であったが、両者はしばしば同じ意味で用いられた。

56) こうした見解を代表したのが、スチュワート・チェンバレン (Stewart Chamberlain)、ギュンター、ローゼンベルクである。

57) s. Lagarde, Paul de: Programm für konservative Partei Preußens, in: Deutsche Schriften, Bd.2, Göttingen <sup>2</sup>1891, S.366, 368. ラガルドの著作は20世紀初期から第三帝国の時代にかけて、大きな影響を揮った。

58) Chapoutot, J.: a.a.O., S.41. 20世紀から現代にかけての欧米における印欧語族研究の孕む反ユダヤ主義、ファシズムとの近さなどの政治性については、松村一男「なぜ私は印欧語族研究を止めたか」(竹沢尚一郎編『宗教とファシズム』、水声社、2010年) pp.349-367を参照。

づいて、聖書（ユダヤ）の伝統をアーリアの伝統によって置き換えることを目指した。「精神史研究所」は、この「高等学院」の外郭機関の一つとして構想された。折しもミュンヘン大学では教会闘争の結果、1939年に神学部の解体が決められていた。そこで空いた教員のポスト、建物、予算を、「精神史研究所」が引き継ぐことが目指された<sup>59)</sup>。

ハルダーは、どのような経緯で「精神史研究所」へ赴任したのであろうか。ベルリン大学の政治教育学の教授で第三帝国の学問政治において重要な役割を演じ、「高等学院」の責任者であったアルフレート・ボイムラー（Alfred Baeumler）がローゼンベルクにハルダーを紹介した<sup>60)</sup>。ハルダー招聘の詳細は実証的に明らかではない。しかし彼がナチ党の政権獲得後ナチズムへの賛同を明らかにしたこと、ナチ関係の機関に加入したこと<sup>61)</sup>、プラトン主義を（キリスト教神学に収斂する方向ではなく）ギリシア的に純化する方向で思索を深め名声を得ていたこと、人文主義者にしては珍しくスポーツに関心を抱いていたこと<sup>62)</sup> などから、ローゼンベルクなどの関心を惹いたことが考えられる。

翻ってハルダーの側から「精神史研究所」への招聘は、どのように映ったのであろうか。第二章のⅡにおいて、彼がヴァイマル共和国における人文主義的な古典語教育・古典研究の存続へ向けて尽力したことを述べた。第三帝国の新体制下においても人文主義的な古典語教育・古典研究は、人文主義者の期待にもかかわらず安泰というわけではなかった<sup>63)</sup>。こういった中で（『グノーモン』の責任編集に携わるなど）組織運営の才能を認められ、「特別な関心が最初から学校と大学における文教改革、学問組織の問いにあった」<sup>64)</sup> ハルダーが、「精神史研究所」の仕事に関心を抱いたことに不思議はない。彼自身は後年、次のように振り返っている。「精神史研究所は古代学にとってチャンスの意味した。この可能性を一面的に固定され、偏見に捉われた人々（ナチス）の手によって台無しにさせるのではなく、研究のため有用にすることには意味があった。少なくともこの場で、精

59) Schott, G.: a.a.O., S.427.

60) A.a.O., S.426.

61) 高名な人文主義者の中でヘルムート・ベルヴェ（Helmut Berve）などを除けば、例外に属した。

62) Harder, Richard: Sport und Kultur, Ostmarken Rundfunk 4.7.1929 (unveröffentlicht), in: Nachlass von Richard Harder, a.a.O.. Harder, Richard: Das alte Griechenland: die Heimat der olympischen Idee, in: Leibesübungen und körperliche Erziehung, Jg.1936, Heft 14, S.1-7. ボイムラーは「身体訓練の哲学」を推奨した。

63) 「人文主義ギムナジウムは一般的に次のように非難されている。それは後ろ向きで、生活や世間に疎く、中世から現在へ救われた施設で、新しいドイツにおいて生存権を持たない。」(Friel, Karl W.: Vorwort, in: Die deutsche Revolution im altsprachlichen Unterricht, Frankfurt am Main 1936, S.III.) 1938年ナチズムの教育理念に基づく高等学校改革が行われ、古典語の授業時間数がさらに削減され、ギムナジウムは高等学校の特殊形態とされた。

64) Losemann, Volker: Nationalsozialismus und Antike. Studien zur Entwicklung des Faches Alte Geschichte 1933-1945, Hamburg 1977, S.143.

神科学の苦境に対して何かを企てる見込みが提供されていた。こうした意味で私は（精神史）研究所の指導を引き受け、仕事を行った。」<sup>65)</sup> ハルダールの野心は、「精神史研究所」の設立を通して「全古代学の領域に欠けていた中央研究所になるかもしれない何かを立ち上げる」<sup>66)</sup> 点にあったことも指摘されている。

「精神史研究所」を大学の内部に設立する案は、ミュンヘン大学哲学部の強固な反対に遭い実現しなかった。そこで1941年6月にハルダールは、ミュンヘン大学哲学部へ古典文献学者として正式に赴任し、補足的に「高等学院」の外郭機関とされた「精神史研究所」で共同作業を行うことを許された<sup>67)</sup>。大学の中、それを取り巻く様々な機関間の抗争から、彼のミュンヘン大学での身分は最後まではっきりしなかったことが指摘されている<sup>68)</sup>。

ローゼンベルクは1940年3月の覚書において「精神史研究所」の目的を、「アーリア人の精神的なあり方の全財産を、オリエントとヨーロッパの歴史の記録から我がものにする」<sup>69)</sup> とした。その作業の結果は、「(ナチ) 党、特に教育のため積極的に活かすことができなければならない」とされた<sup>70)</sup>。ハルダールはこの覚書を踏まえ、「高等学院」の探求課題の要約として自らの非公式の覚書<sup>71)</sup> を1940年4月頃に執筆し、同年10月に提出した。この覚書によれば精神史研究所の活動分野は、以下の三点からなるとされた。

第一に、「アーリア精神史の活動分野は、インドゲルマンの核心とそのアーリア的な実質を常に顧慮して活性化され内的に結合された、個々の民族の精神史である」<sup>72)</sup> とされた。その際ハルダールはどの民族も人種的に純粋ではないことを認めたが、「原インドゲルマン民族の根源における人種的な統一と純粋性を措定」<sup>73)</sup> した。そして「移動時代におけるインドゲルマン部族の、先住民とのその都度の対決」<sup>74)</sup> を調査すべきとした。第二に、「インドゲルマンの偉大さを特に証しする業績、すなわち政治的な共同体の形成、競争的なスポーツ、表音文字、偉大な英雄叙事詩、悲劇の舞台、記念碑的な建築や彫刻品、歴史記述、哲学、学問、アーリアの宗教、アーリアの法を明らかにする

---

65) Schott, G.: a.a.O., S.463.

66) A.a.O., S.462

67) A.a.O., S.438.

68) A.a.o., S.431.

69) Losemann, V.: a.a.O., S.142.

70) A.a.O..

71) Schott, G.; a.a.O., S.427f.

72) A.a.O., S.427.

73) A.a.O..

74) A.a.O..

こと」<sup>75)</sup>である。第三に、非インドゲルマンの外部世界との対決に際して「幾つかの範例的な場合、最終的に民族性と文化の破壊に至る浸透と外国人人口の過剰の生物学的な過程」<sup>76)</sup>を究明する点にあるとされた。

以上の三点から、第二の点はおおむね伝統的な古典研究の枠内にある。しかし第一の点と第三の点で構想された精神史が人種史に依存していることは、明らかである<sup>77)</sup>。

## II. 「精神史研究所」における活動

以上のIで触れたハルダーの覚書に基づいて、「精神史研究所」の活動が始まった。その内容は、以下の四つに分けることができる。

第一に、ギリシアにおける実地調査である。1941年ドイツ国防軍がギリシアを占領した後、ローゼンベルク機関に「ギリシア古代学の特別部隊」が結成された。この部隊の成員としてハルダー、古代史家のジークフリート・ラウファー (Siegfried Lauffer)、考古学者のオットー・ヴィルヘルム・フォン・ヴァカーノ (Otto Wilhelm von Vacano) がギリシアへ派遣された (ハルダーはギリシアでの二回目の調査)<sup>78)</sup>。ハルキスとスパルタ近郊において「入植史と関連した地形測量、考古学、碑文学の仕事による古代ギリシアの学問的な探求」<sup>79)</sup>が行われた。スパルタ近郊の発掘調査は北方人種がギリシアへ侵入した過程、先住民との関わりを明らかにすることを目的とした<sup>80)</sup>。ハルダーはハルキス

---

75) A.a.O., S.427f.

76) A.a.O., S.428.具体的な例として「ヘレニズムと(ローマの)帝政時代における住民統計的に基く作業、アリア精神のキリスト教に対する最終戦」(A.a.O.)が挙げられた。

77) ハルダーは1941年1月に提出した「精神史研究所」の予算案において、その活動内容として「北方の血を持つ古代民族における人種の性状、人種本能、人種意識、人種政治に関する資料の収集と価値評価における、真に人種学的な精神史を要求」(A.a.O.)している。

78) ヴァカーノは、「アドルフ・ヒトラー学校」で教鞭を執っていた。ハルダーはヴァカーノが編集した同学校の副読本『スパルタ 北方の支配層による生をめぐる戦い』にスパルタの愛国詩人テュルタイオスによる「エレゲイアー」「エウノミア」の抄訳を後に「古代スパルタの戦争の演説」として掲載する (Harder, Richard: Die altspartanische Kampfrede, in: Vacano, Otto Wilhelm von [Hrsg.]: Sparta. Lebenskampf der nordischen Herrensicht, München 1942, S.47-52)。ヴァカーノが勤めた「アドルフ・ヒトラー学校」、ハルダーが関係した「高等学院」は、中等、高等それぞれ異なる段階で、共にナチ党の幹部養成を目的とした。したがって両者のギリシアにおける実地調査は、いわばナチ版の「高大連携」として構想されていたのかもしれない。

79) Losemann, V.: a.a.O., S.157.

80) ヴァカーノは次のような結果に到達している。「(初期銅器文化の本来の担い手はドナウ地方出身の、研磨された黒色の陶器と共にギリシアへ流入した住民集団であった)にもかかわらず、初期銅器文化をすでにインドゲルマン文化と名付けてよいだろう。というのも、今日においてそもそも言明が可能な限りで、こうした文化を動かし、政治的ではないにせよ精神的に基礎付けたのは、インドゲルマン的、北方的な力

での約三ヶ月にわたる実地調査を担当し、それは初期ギリシアの歴史を知る上で重要な一歩とされた。その成果は、『ハルクスのカルポクラテスとメンフィスによるイシスのプロパガンダ』<sup>81)</sup>として刊行された。以上はIで触れたハルダールの覚書から、主に第一の活動計画と関わる活動であった。

第二に、ギリシアの文字に関する研究が挙げられる。ハルクスの実地調査で得られた碑文学上の知見などは、ハルダールが1940年代に著したギリシアの文字に関する論文（「ギリシア語の書き言葉性への注釈」[1942年]<sup>82)</sup>、「ギリシア人の下での文字の会得」<sup>83)</sup>[1942年]、「ロツテ文字<sup>84)</sup>」<sup>85)</sup>[1943年])の執筆に活かされた。これはIで触れたハルダールの覚書から第二の活動計画と関わり、純粋に学問的な業績と見なされている<sup>86)</sup>。

第三に、「精神史研究所」紀要の刊行が挙げられる（4号まで）。この紀要は関係者へ送付された。ハルダールはドイツ敗戦の直前1945年4月、「テュルタイオスの歴史的な位置付け」<sup>87)</sup>を同紀要の最終号に寄稿している。本論文はテュルタイオス「エレゲイアー」をギリシアの精神史に位置付けることを目的とし緻密な分析を行っている。当時このテーマを取り上げたこと自体に、彼の政治的な態度が反映していたとも言える<sup>88)</sup>。

第四に、図書購入、スライド保存貸与機関の設立、後継研究者の支援が挙げられる<sup>89)</sup>。

こうしてハルダールが1940年の覚書において構想した「精神史研究所」の三つの活動計画から、ごく僅かが実現に至った（ハルダールによれば「精神史研究所」は、第二次世界大戦の終了後に本格的な活動を開始する予定であった<sup>90)</sup>）。しかもその多くは、伝統的な古典研究の延長に位置付けられるものであった。にもかかわらずハルダールが第二次世界大戦後の非ナチ化の審査で「同調者」と見なされたことは、彼が1942年11/12月号の『ナチズム月報』に発表した「フランツ・ポップとイン

---

だからである。」(Vacano, Otto Wilhelm von: *Lelegia. Eine vorgriechische Siedlung auf dem Kufowuno bei Sparta, Sonthofen* 1944, S.356.)

81) Harder, Richard: *Karpokrates von Chalkis und die memphistische Isispropaganda*, Berlin 1944.

82) Harder, Richard: *Bemerkungen zur griechischen Schriftlichkeit*, in: *Kleine Schriften*, a.a.O., S.57-80.

83) Harder, Richard: *Die Meisterung der Schrift durch die Griechen*, in: a.a.O., S.81-97.

84) 上から下へ垂直に記された文字。

85) Harder, Richard: *Rottenschrift*, in, a.a.O., S.98-124.

86) Losemann, V.: a.a.O., S.173.

87) Harder, Richard: *Die geschichtliche Stellung des Tyrtaios*, in: *Kleine Schriften*, a.a.O., S.180-205.

88) テュルタイオスは第二次メッセニア戦争でスパルタ市民に祖国に殉ずる死を促し、ナチスの関係者に好んで引用された。拙論「ドイツ第三帝国におけるスパルタの受容（1）」同上、pp.203f.、拙論「ドイツ第三帝国におけるスパルタの受容（2）」同上、p.5を参照。

89) Schott, G.: a.a.O., S.462f.

90) A.a.O., S.461.



ドゲルマン学」(以下「ポップとインドゲルマン学」と略)という論文によるところが大きいと思われる。フォルカー・ローゼマン(Volker Losemann)によれば、この論文には「ハルダーによる、インドゲルマン精神史的方法的な基礎付けがある意味で現れている」<sup>91)</sup>。

本論の冒頭でハルダーは、19世紀ドイツの比較言語学者フランツ・ポップ(Franz Bopp)の研究を顕彰する。ポップは本章Iの最初で述べた、ヨーロッパ、西アジアの様々な言語が共通のインドゲルマン祖語から派生したことを主張した人に他ならない。ポップ以後インドゲルマン諸語の研究が進み、「最後に次の仮説が立てられた。個別言語の相違は、その都度の非インドゲルマンの下層階級の言語的な働きかけと関連している。(中略)いずれにせよ視点は(ポップの時代と比べて)変わった。根源の再構成は背景へ退き、本来の目標は個別言語の起源からその今日のあり方へ向けた歴史的な解釈に置かれた。」<sup>92)</sup>さらに「言語は(中略)民族性や人種と安易に同一視できない。にもかかわらず言語は、(中略)人種的な方向付けの暫定的かもしれないが、不可欠の手段になる。(中略)それぞれの言語はそれを話す共同体を前提するので、それによってインドゲルマン人からなる民族の歴史的な存在、つまり我々の先史の基本的な事実が証明された」<sup>93)</sup>という。そしてハルダーは、様々なインドゲルマン諸語を比較する際の方法的な注意を述べ<sup>94)</sup>、言語の歴史的な継続と変化に触れる。

「インドゲルマン(諸語)の等置は継続を意味する。こうした継続はその驚くべき恒常性において、結局のところ人種の不変性に基づくに違いない。他方で我々は、そもそも個々の民族を性格的に異なる固有のあり方にする、あの深部へ達する変化を持つ。(中略)こうした変化や個々の民族の分離に際して、人種が再び決定的な役割を演じることは疑いない。個々の民族の間の相違とその根本民族からの逸脱は、それらの民族がその都度異なった種類の人種的な下層階級の上にいることによって制限されているに違いない。」<sup>95)</sup>

こうしてハルダーはポップを嚆矢とする言語学研究を人種に引き付けて解釈し、「フランツ・ポップの遺産はインドゲルマンの全精神科学に共通の課題となっている」<sup>96)</sup>と結ぶ。

91) Losemann, V.: a.a.O., S.169.

92) Harder, Richard: Franz Bopp und die Indogermanistik. Zu Bopps 75jährigem Todestag, 23.Oktober 1942, in: Nationalsozialistische Monatshefte, Bd.152/153, 1942, S.754f.

93) A.a.O., S.755. 段落の改行部は訳文に反映していない。

94) A.a.O., S.758.

95) A.a.O., S.760. 段落の改行部は訳文に反映していない。

96) A.a.O., S.761.

注92、95における（非インドゲルマンの）「下層階級」、注76における「外国人」は、ドイツが第二次世界大戦中に自らの生存圏として占領した東部地域の住民と重なった<sup>97)</sup>。ローゼマンは「ポップとインドゲルマン学」に関して、「政治的な学問への信仰告白は明らか<sup>98)</sup>」であると評し、ゲルハルト・ショット（Gerhard Schott）は「ハルダーは、フランツ・ポップを模範として体制側のインドゲルマン言語学を前面に据えながら、ナチズム的、人種学的方法を馴染みの学問性によって、冷静かつ事柄に即して試す準備ができていた<sup>99)</sup>」と記している。

1944年に至ってハルダーは「精神史研究所」の活動との関連下、「メンフィスによるイシスのプロパガンダ」<sup>100)</sup>「ヨーロッパ概念の成立」<sup>101)</sup>という文章を、時局の強い影響下に発表している。

### Ⅲ. 「白バラ」配布文書の鑑定

I、IIにおいて検討したように、ハルダーはナチズムのイデオロギーに沿う形で「精神史研究所」の活動を計画し、部分的にそれを実行した。したがって彼がナチスの関係者の信頼を得たことは、想像に難くない。その結果、学問と直接、関係がない治安上の任務が、ハルダーに課せられた。

1942年から1943年にかけて「白バラ」と称するグループがミュンヘンを中心として、ナチ政権を批判しそれへの抵抗を呼びかける文書を、匿名で任意の人に郵送するなどした。秘密国家警察は<sup>グシユクタボ</sup>この配布文書を押収し、抵抗運動の背景、当事者を知ること努めた。このような目的の下、配布

---

97) ハルダーがこれを意識していたことを推測させるものとして、彼はヴィクトール・ヘーン（Victor Hehn）の研究を評価している（A.a.O., S.757）。ヘーンはバルト海沿岸出身のドイツ人として、反ロシア的、反セム主義的な書物を著しており、ハルダーはヘーンの反ロシア的な書物を「ローゼンベルク機関」から刊行することを計画していた（s. Losemann, V.: a.a.O., S.171f.）。ヴァカーノは、中世におけるドイツ人の東方植民をスパルタ人のメッセニア占領に譬えていた（Vacano, O.W.v.: Sparta, a.a.O., S.7）。拙論「ドイツ第三帝国におけるスパルタの受容（1）」同上、pp.218-219も参照。

98) Losemann, V.: a.a.O., S.173.

99) Schott, G.: a.a.O., S.430.

100) Harder, Richard: Die Isispropaganda von Memphis, in: Forschungen und Fortschritte, Jg.20, Nr/31/32/33, 1944, S.241f. これは注81で触れた作品を一般向けに短縮したものである。ハルダーによればハルキスの碑文には、メンフィスの僧侶がエジプトのイシス神への信仰をギリシア人に気に入る形で巧みにギリシアへ導入した経緯が現れているという。これを反面教師として、同時代のドイツ人は外国のプロパガンダに用心すべきであるという。

101) Harder, Richard: Die Entstehung des Begriffs Europa, in: Europäischer Wissenschafts-Dienst, 1944, Nr.3/4, S.6f. ハルダーはヨーロッパという概念を、アジアや東方との（本質的な）対立において捉えた。「インドゲルマン人にとって戦士としてのあり方と精神的創造者としてのあり方は、同一の内的な貴族に基づいている。こうした高貴な力の統一は、我々の人種の最も高貴な伝承に由来し、生きた未来、新しいヨーロッパへと導く。」（A.a.O., S.7.）

文書の執筆者を知るための鑑定が古典文献学者のハルダーに委ねられた<sup>102)</sup>。

以下、「白バラ」配布文書とハルダーの鑑定書を突き合わせ、ハルダーのナチズムに対する関わりを考察する助けとする。鑑定の対象となる六つの配布文書はハルダーに、二回に分けて渡された（第一回は第五、第六配布文書、第二回は残りの配布文書）。彼はその都度、鑑定書を提出した<sup>103)</sup>。

ハルダーは第一の鑑定書の冒頭で、精神科学的な吟味を行うと断っている。そして（第五、第六という）配布文書を「下手くそな作品」と評しつつも、内容的、文体的に「途方もなく高い水準にある」ことを認めている。引き続き彼は、鑑定結果として八つのテーゼを掲げる。すなわち二つの配布文書は同じ筆者により（1）、異なる時期に書かれた（2）。その著者はドイツ文学に精通した人、特に精神科学者か神学者であり（3）、ルター訳のドイツ語聖書に馴染んだ人（4）、大学と近い関係にある人で、大学での勉強を1933年頃に始め（5）、ナチズムとその展開に詳しい（6）。（第五、第六という）配布文書は急いで書いたことを推測させる（7）。その著者は外国の状況や議論に精通しておらず、パイエルンを意識している（8）。最後にまとめとして、配布文書は書き物機の産物に過ぎず、その著者は世俗に疎い才能ある知識人で、兵士や労働者の広い層に反響は期待できないという。

第二の鑑定書は、第一の鑑定書の補強ないしは補足という体裁を取っている。ハルダーによれば、（第一から第四の）配布文書にはキリスト教（の特に神秘主義）の特徴が明らかであるという。配布文書の著者は反体制派を糾合し受動的抵抗を行おうとするが、それが喫緊の戦争協力とどう折り合うのか答えていない。そこからハルダーは、第一の鑑定書と同様に配布文書の著者の世俗への疎さ、完全な無責任を非難する。最後に彼は、配布文書の著者の政治的な伝記を再構成する。

鑑定書は即日提出された。ハルダーが掲げた八つのテーゼの中で、後世から振り返ると（2、4、6、7、8という）五つが当たり、（1、3、5という）三つが外れていた。鑑定に当たってハルダーがナチズムの側に立っていることは、明らかである。しかし彼が配布文書の著者の高い知性を認めている点に、彼の学問的な良心を見てよいのかもしれない。鑑定に際して注目すべきは、ハルダーの古典文献学者としての以前の修業が活かされていることである。すなわち彼が『オケルス・ルカヌス』において「万物の本性について」という著作の様々な版を「年代順に確定する試み」<sup>104)</sup>は、配布文書が著された順序を確定する際に反映している。またハルダーは、「スキピオの夢について」

102) 東西ドイツ統一後の1995年、旧東ドイツ政府の保管していた公文書が閲覧可能となった。それを調査した結果ハルダーが秘密国家警察からの依頼で「白バラ」配布文書を検分し、鑑定書を付していたことが明らかとなった(Schott, G.: a.a.O., S.413)。

103) 第一の鑑定書は1943年2月17日、第二の鑑定書は同年2月18日に提出。以下の鑑定結果は、Lill, Rudolf (Hrsg.): Hochverrat? Neue Forschungen zur »Weiße Rose«, Konstanz 1999, S.209-216による。

104) Harder, R.: 'Ocellus Lucanus', a.a.O., S.149.

において言及した「史料批判的な再構成を資料の作者の全体的な評価と分けて考える」<sup>105)</sup>やり方を、「白バラ」配布文書の検分の際に応用している。

「白バラ」配布文書に記されていることで、ハルダーが鑑定書の中で言及していないものの、彼が検分の前後に記した著作と関わる点があった。引き続き、そういった点を検討してゆく。

今日の研究では、「白バラ」の思想圏がキリスト教のみならず人文主義の伝統に負うことが明らかにされている<sup>106)</sup>。しかしハルダーは人文主義者の周辺に配布文書作成の嫌疑がかかるのを避けるためか、これらのことに全く言及していない。また第二配布文書においては、ドイツ人が自らの犯罪に目をつぶっていることが「ドイツ人が自らの原始的で人間的な感情において野蛮になった(verroht)」証とされている。これに先んじてハルダーは1930年、ナチ・ドイツ学生連盟の学生を同様の「野蛮Verrohung」<sup>107)</sup>がゆえに批判していた。さらに第四配布文書においては、「おそらく合理的な手段でナチズムのテロ国家に対して戦わなければならないだろう」とある。ハルダーは第二次世界大戦後に記した「自己弁明」の中で、自らが「(ナチズムとの)共同作業によって事態を理性的な道へ導こう」<sup>108)</sup>とする期待を抱いたと記している。最後の二点に関して、彼は(かつての)自分と似たものを「白バラ」配布文書の中に見出したと思われる。

しかしそれにもまして「白バラ」配布文書に記された以下の点は、ハルダーに対する大きな問いになったと思われる。第三配布文書は「国家は神的な秩序の類比でなければならない」と説き、第三帝国が不法国家であることを弾劾した。ハルダーは『クリトン』後書において「国家の不当な掟に立ち向かうのは、ある状態においては正義、いや義務ではないのか？」<sup>109)</sup>という、「白バラ」が抱いたのと同様の問いを掲げていた。しかし国家の暴力と法を区別し、後者を理想視したハルダーは、ソクラテスの言行を借りてこの問いに否定的な答えを与えていた<sup>110)</sup>。第二配布文書はポーラン

---

105) Harder, R.: Über Ciceros Somnium Scipionis, a.a.O., S.355.

106) Onken, Björn: Humanistische Bildung im Widerstand. Die Weiße Rose und das kulturelle Erbe der Antike, in: *omni historia curiosus. Studien zur Geschichte von der Antike bis zur Neuzeit. Festschrift für Helmut Schneider zum 65. Geburtstag*, hrsg.v.Björn Onken und Dorothea Rohde, Wiesbaden 2011, S.227-246 第一配布文書においてはスパルタに似た第三帝国がシラーの「リュクルゴスとソロンの立法」を借りて批判され、ローマの將軍でありながらもローマから追放され、母と妻に涙を流させたくないためローマの攻略を諦めたガイウス・マルキウス・コリオラヌス(Gaius Marcius Coriolanus)が称賛され、ギリシアの七賢人の一人エピメニデス(Epimenides)を詠ったゲーテの祝祭劇「エピメニデスの覚醒」の一節が引用されている。第三配布文書では第三帝国の政体が(アリストテレスの『政治学』に依拠して)古代ギリシアの僭主制に譬えられ、批判されている。

107) 注48を参照。

108) Harder, Richard: Selbstklärung, in: Schott, G.: a.a.O., S.495.

109) Harder, R.: Platos Kriton, a.a.O., S.238.

110) 「ソクラテスが被った不法行為は、法ではなく人間が加えた(54C-原注)。つまりここで法は、国家暴力

ドで30万人のユダヤ人が殺害されたことを、「人間の尊厳に対する最も恐るべき犯罪」として告発した。ハルダーは古代ギリシア・ローマの人間性を評価していた<sup>111)</sup>にもかかわらず、この箇所に鑑定書では言及していない。

「人間の尊厳に対する最も恐るべき犯罪」は、人種主義に基づいて行われた。ハルダーは自らの(言語学研究、古典研究を人種主義と結び付ける)インドゲルマン精神史の構想と第三帝国の侵略政策、反ユダヤ主義との関連を、どの程度、自覚していたのだろうか。これに関して彼自身の証言は残されていない。民族共同体教育施設の生徒は、第二次世界大戦後、次のように振り返っている。「シュパンダウ(の民族共同体教育施設)でメンデルの法則に取り憑かれた我々の生物学の教師がアーリア人種とディナール人種<sup>112)</sup>の頭蓋骨の形態について語った時、誰一人として、それが人種的な大量虐殺に至るかもしれないこと、その過ちについて考えた人はいませんでした。」<sup>113)</sup>これと同様ハルダーも、インドゲルマン精神史の構想と第三帝国の侵略政策、反ユダヤ主義との関連に盲目だったのだろうか。権力者の気に入る言葉を使うリップサービス<sup>114)</sup>で、面従腹背(古典研究、学問性の維持)が貫けると思ったのか。しかしハルダーがインドゲルマン精神史の構想を通して、自覚的にナチズムとの協調に至ったことも考えられる<sup>115)</sup>。彼は以下のようなヨーロッパの学問観の体現者であったかもしれないからである。

「ヨーロッパがヨーロッパであるために、彼は東洋へ侵入しなければならなかった。(中略)かれ(ヨーロッパ)は歴史を変えることによって、抽象に内容を与えてゆく。抽象は思惟の冒険ではあるが、デタラメではない。科学の仮説のようなもので、実験で確かめられるならば、それは真理だ。むしろ確かめられる予想があるから、そのような冒険がうまれるのだといったほうがいいかもしれない。(中略)(ヨーロッパでは、概念という)駒が進むだけでなく、駒を動

---

による個々の行為とは区別されている。法は(国家暴力よりも)何かより高いものである。」(A.a.O.)「国家は正しくない。しかし国家の中で起きる不法行為は、“人間”によって起きる。しかし自らを国家とその不法行為に順応させ、国家の判決とその不当な判決に聞き従う——この法は永遠である。」(A.a.O., S.238f.)

111) 「被支配者の安寧のための配慮は、ここ(キケロの弟クイントゥス宛の手紙)で明確に人間性の義務とされた」(Harder, R.: Nachträgliches zu humanitas, a.a.O., S.410.)

112) コーカソイドに属する人種の下位区分。主にバルカン半島北西部に分布するとされた。

113) Wechmar, Rüdiger Freiherr von: Ich wurde von der preußischen Tradition erzogen, in: »Wir waren Hitlers Elitenschüler«. Ehemalige Zöglinge der NS-Ausleseschulen brechen ihr Schweigen, Hamburg 1998, S.35.

114) 注46、77を参照。

115) ハルダーは「精神史研究所」へ赴任したのと同じ年、キリスト教会から脱退している(Schott, G.: a.a.O., S.460)。これをナチズムへの帰依と関連付けられるかもしれない。

かしている盤そのものが、駒が進むにつれて進むように見える。』<sup>116)</sup>

人種理論という新たなパラダイムと思われた「学問」は、(第三帝国の侵略という) 実践と不可分であった。ハルダーは1947年に記した「精神史研究所」の覚書に関する反省において、ポップの言語学研究の人種主義への応用は、「Probefall 実験的な事例」<sup>117)</sup> であったと記している。

いずれにせよハルダーは「白バラ」配布文書の中に、自らに似たもの、にもかかわらず目の第三帝国に自らと対照的な態度を取っているもの、自らの過去の言行の変節を咎めるものを見出したと思われる。こうしたことから鑑定書の中の、「白バラ」配布文書が「机上の産物」でその著者が「世俗に疎い」<sup>118)</sup> とする、自己嫌悪の投影ともいえる評が説明できるのかもしれない。古典教養は「白バラ」のメンバーにおいては反体制、ハルダーにおいては体制維持の方向へ働いたと言える。

ハルダーの鑑定書は、「白バラ」に加わった人々への(死刑) 判決に影響を与えなかった<sup>119)</sup>。彼は第二次世界大戦後、非ナチ化の手続きの中で「白バラ」配布文書の鑑定書を記したことに触れていない。1952年、シヨル兄妹の姉であるインゲ・シヨル(Inge Scholl)による『白バラ』<sup>120)</sup> が刊行された。ハルダーもこの本を通して、「白バラ」の思想圏を知ったことが推測されている<sup>121)</sup>。

以上の第三章においてはハルダーとナチズムとの関わりについて、I.「精神史研究所」の設置、II.「精神史研究所」における活動、III.「白バラ」配布文書の鑑定という観点から検討を行った。ハルダーは「精神史研究所」設立の中に、周縁化の危機に瀕していた古典研究が制度的に存続するチャンスを読み取った。しかしインドゲルマン精神史の構想それ自体が、第三帝国の国家教説と密接に関連していた。「実際に起きたように見えた、インドゲルマン人の侵略は、常に現在における侵略の欲望の正当化あるいはモデルでもあった。インドゲルマン人がヨーロッパあるいはアジアを征服したかにかかわらず、彼らは征服者で支配人種、支配者的な人種であった。インドゲルマン人の進軍は、北方人種の最初の侵略と見なされた。(中略)(北方人種の) 第六の侵略はヒトラーの戦争と見なされた。』<sup>122)</sup>。ハルダーが「スキピオの夢について」においてキケロの中に見出していた「現実

---

116) 竹内好「中国の近代と日本の近代」(『日本とアジア』所収、ちくま学芸文庫、1993年) pp.14-23.

117) Schott, G.: a.a.O., S.462.

118) ハルダーは古典文献学など“世俗に疎い”学科の存続の可能性が脅かされ、それを「精神史研究所」の設立によってナチ政権から守ろうとしたと記している (Schott, G.: a.a.O., S.495.)。

119) A.a.O., S.457.

120) Scholl, Inge: Die Weiße Rose, Frankfurt am Main 1952.

121) Schott, G.: a.a.O., S.458f.

122) Römer, Ruth: Sprachwissenschaft und Rassenideologie in Deutschland, München 1985, S.83.

政治との対立的な緊張関係<sup>123)</sup>は、彼とナチズムとの関わりにおいて希薄になっていったと思われる。ハルダーが「白バラ」配布文書の鑑定に応じたこと、鑑定書の内容が、これを示す。彼が「精神史研究所」の活動に際して学問性と独立性の確保に尽力したと彼および彼の理解者が後に主張し<sup>124)</sup>、それに正しい面がある<sup>125)</sup>にせよ。

#### 第四章 第二次世界大戦後のハルダー

第二次世界大戦に第三帝国は敗北し、1949年ドイツ連邦共和国とドイツ民主共和国が成立した。ドイツ連邦共和国は自由主義世界に属し、その基本法において「人間の尊厳は不可侵」であることが謳われた。ドイツ民主共和国は共産主義世界の一員となった。その結果、主に西欧諸国およびアメリカ合衆国、主に東欧諸国およびソ連との対立からなる冷戦体制が始まった。この二つの世界の対立は、人文主義の素養のある人々にはしばしばかつての（自由を重んじる）ギリシア・ローマ世界と（ペルシア帝国など専制的な）オリエントの対立に重ねられた<sup>126)</sup>。ハルダーはドイツ連邦共和国に居を構えた。

非ナチ化の審査で「同調者」と見なされたハルダーは、ミュンヘン大学での教職から退いた。ニュルンベルク裁判においては「人間性に対する犯罪」が訴追条項に入れられ、ナチスによる人間性に対する数多くの侵犯が公の場で明らかにされた。そういった中でハルダーは、かつて自らが「哲学のローマへの定着」において記した次の言葉を思い浮かべなかったであろうか。「人間性は<sup>フマニタス</sup>勞わりや穏和さ、鷹揚さ、現実の厳しい必然性を度外視することと同義である。というわけでローマの将軍は、厳格な戦時法を度外視することによって、服従した属州を寛大に扱う。（中略）人間的なローマ人は、あらゆる権力手段を用い、あるいは間近に攻撃を仕掛けると公に伝えることによって、内政上の敵に対して容赦なく振舞うことはなかった。」<sup>127)</sup> ナチスは国内、（主に）東部の占領地域において、これと反対のことを多くの場合、人種主義に基づいて意図的に行った<sup>128)</sup>。ハルダーは隠遁

123) 注17を参照。

124) Schott, G.: a.a.O., S.459, 496. Marg, W.: a.a.O., S.483. ハルダーのミュンスター大学への赴任の際、ルドルフ・アレクサンダー・シュレーダー（Rudolf Alexander Schröder）によって付された鑑定書（Nachlass von Richard Harder im Universitätsarchiv Münster, Bestand 62 [Philosophische Fakultät, Sachakten], Nummer 412）などを参照。

125) 注52、86を参照。

126) 第二次世界大戦後、ドイツ連邦共和国においてしばしば政治的なスローガンとして用いられた（自由なキリスト教的）「西洋Abendland」がその例である。「西洋Abendland」は「東洋・オリエントMorgenland」と対立的に捉えられ、その起源は古代ギリシアに求められる場合があった（s. Faber, Richard: Abendland. Ein politischer Kampfbegriff, Berlin 2002）。

127) Harder, R.: Die Einbürgerung der Philosophie in Rom, a.a.O., S.339f.. 注111も参照。

128) s. Rede Heinrich Himmlers über die SS-Moral, 4.10.1943, in: Das Dritte Reich. Dokumente zur Innen- und

中、自らのナチズムとの関わりを振り返るに至った。彼は1947年に残したメモの中で、1933年から1945年にかけて著した自著とナチズムとの関わりを検討した。それは自己弁護的な色彩が強い<sup>129)</sup>。それが変化したのは「自己弁明」(1949年)というメモにおいてである。

「誤って行ったことを後になって美化するつもりはない。私がナチズムと同盟したことは、事柄に即して間違っていた。今日の距離から見ると、次のことがわかる。つまり共同作業によって事態を理性的な道へ導こうとする期待は、幻想であった。私はまた、学者が共同作業によって自分自身の信用を落とすだけでなく、学者によって代表された事柄の信用を一部、落としたのだ。後者の信用を失墜させた点に、私は最も中心的な罪の契機を見る。」<sup>130)</sup>

ハルダーは「プラトンとアテナイ」(1934年)において、「ギリシア人と異邦人バルバルとの同盟」<sup>131)</sup>をギリシア人の「原罪」と性格付けていた。これを記してから15年後のハルダーは、野蛮人バルバルであることが判明<sup>132)</sup>したナチスとの同盟との過ちを認めるに至った。すでに触れたようにハルダーは人文主義的な古典語教育・古典研究の制度的な維持に尽力し、それも与りナチズムと協調するに至った。かかる過去がゆえに、彼は自らの「最も中心的な罪の契機」を、(ナチズムの被害者に対してではなく)「学者によって代表された事柄の信用を一部、落とした」点に見たと考えられる。

ハルダーによるこうした自らの過去に対する反省は、第二次世界大戦後の研究にどのように反映し、彼の研究はいかなる展開を遂げたのか。引き続き、同大戦後の彼の業績を検討してゆく。彼はヴァイマル共和国、第三帝国の下におけるように、古典語教育・古典研究の制度的な維持という問題に関わることはもはやなかった。ギリシアとドイツ人、古典教養と国家の絆について直接、語ることもなく、プラトン主義を表立って論じることもなくなった。第二次世界大戦後のハルダーの業績は、おおむね研究面に限定される。以下「ギリシア人の固有性」「ギリシア文化入門」(共に1949年)、「古代ギリシア人の世界公共性」(1953年)を手がかりに、第二次世界大戦中の人種主義的な古典研究の構想が同大戦後、どのように変化したのか、検討を行う。その際ギリシア(・ローマ)人と先住民、外国人、オリエントとの関わりがどのように捉えられるに至ったのか、留意する。

---

Aussenpolitik, hrsg.v.Wolfgang Michalka, München 1985, S.256f.

129) Schott, G.: a.a.O., S.461-465.

130) A.a.O., S.495.

131) ペロポネソス戦争において、ギリシアの諸ポリスがペルシアと同盟を結んだことを指す。

132) ヒトラーは1923年4月20日の演説で、「我々は非人間的になろう!」と訴えていた(Hitler, Adolf: Mein Kampf. Eine kritische Edition, hrsg.v.Christian Hartmann, Thomas Vordermayer, Othmar Plöckinger, Roman Töppel, München 2016, Bd.1, S.721)。



まず「精神史研究所」の第一の活動分野「移動時代におけるインドゲルマン部族の、先住民とのその都度の対決」と関連してハルダーは、「ギリシア人の固有性」の中で次のように記している。

「しかしギリシア人は、ニューイングランドへの入植者よりもむしろコルテスのように先住民と付き合ったように見える。先住民は下層階級となった。先住民は異質な様式で高い段階に立っており、以前に予感できたよりも深くギリシア人の生活に働きかけた。(中略)ギリシア人は彼らを絶滅したのではなく同化した。同化する者が同化される者に似るのは、世界の至る所で同じである。力の相違があるにせよ、結局のところ全ては相互的な交流という結果になる。」<sup>133)</sup>

「ポップとインドゲルマン学」においては、インドゲルマンが(先住民と比べて)高い文化の担い手とされていた<sup>134)</sup>。ところが上の引用において、「先住民は異質な様式で高い段階に立って」いたとされ、ギリシア人と先住民の関係はより対等に近いものとして解釈されている。それは、ギリシア人(征服民族)と先住民(被征服民族)との「相互的な交流」が語られていることから、明らかである。その際ハルダーは北方から侵入したギリシア人を、中米を16世紀に植民地化したエルナン・コルテス(Hernán Cortez)に譬えている。そして(北アメリカに植民地を築き、先住民の多くを殺したイギリス人と比べて)、先住民に対して比較的、穏和に振舞った仕方を擁護している。

次に「精神史研究所」の第三の活動分野「幾つかの範例的な場合、最終的に民族性と文化の破壊に至る浸透と外国人人口の過剰の生物学的な過程」と関連してハルダーは、「ギリシア文化入門」の中で次のように記している。「前4世紀以後、ギリシア文化の担い手として登場する外国人、異邦人、半異邦人の数が増える。(中略)未知なるものの溶かす坩堝であるギリシア文化は、外国人人口の過剰で没落したのではない。」<sup>135)</sup>

「精神史研究所」の第一、第三の活動分野と関連した二つの点について、ギリシア人と先住民、外国人との関わりは、前者が後者二者を排除する、それゆえ前者が後者二者に脅かされるというのではなく、いわば共存共栄の関係、(人間的という言葉を用いることなく)より人間的なものとして捉え直されている。かかる点に、第二次世界大戦後におけるハルダーの認識の変化が窺われる。

では第二次世界大戦中におけるハルダーの人種主義的な古典研究の構想は、こうして同大戦後、清算されたのだろうか。オリエントとギリシア人の関係について、ハルダーは「ギリシア人の固有性」において次のように述べる。

---

133) Harder, R.: *Eigenart der Griechen*, a.a.O., S.53.

134) Harder, R.: *Franz Bopp und die Indogermanistik*, a.a.O., S.756.

135) Harder, R.: *Einführung in die griechische Kultur*, in: *Eigenart der Griechen*, a.a.O., S.70.

「ギリシア人はオリエントを克服するのみならずそれを解明し、つまりオリエントをして語らしめた。自慢を好むオリエントの自己称賛は自らの空間の外部では、その退屈な単調さによって聞かれることなく、次第に消え去ったことだろう。(中略) あたかもギリシア人は、魔法をかけられたこの(オリエントという)王子を、自らへの囚われという微睡みから解放した。ギリシア人はオリエント世界を有機体的に成長していること、その単なる存在という見通しの効かない錯綜から、解放したのである。」<sup>136)</sup>

上の引用においては、オリエントに関して「自慢を好む」「自己称賛」「退屈な単調さによって聞かれることなく」「魔法をかけられた王子」など、否定的な性格付けが行われている。これとは対照的にギリシアはオリエントを教化し、「自らへの囚われ」から解放するのを助ける、上に立つ存在とされている。

ヨーロッパのルーツの一つはギリシアに求められている。上でハルダーが記したギリシアとオリエントの関係を、ヨーロッパとオリエントの関係のいわばひな形として捉えてよいのであれば、上の注136の引用には、1978年エドワード・サイード(Edward Said)がオリエンタリズムの名の下に批判したヨーロッパとオリエントの関わりが表れている<sup>137)</sup>。その際サイードは、オリエンタリズムに基づく歴史的な優位によって人種的なステレオタイプが(ヨーロッパに)供給されたと見なした<sup>138)</sup>。するとハルダーの第二次世界大戦中の人種主義的な古典研究の構想は完全に清算されたわけではなく、同大戦後にはオリエンタリズムとして形を変えて生き延びた(あるいは彼のオリエンタリズムが同大戦中の人種主義的な古典研究の構想に含まれていた)ことが考えられる。注116で引用した竹内好のヨーロッパ学問観は、今日ではしばしばオリエンタリズム批判の先駆けとされる<sup>139)</sup>。この竹内によるヨーロッパ学問観とハルダーによるインドゲルマン精神史の構想が類似している可能性を、指摘した<sup>140)</sup>。ここからも、ハルダーにおける人種主義的な古典研究の構想とオリエンタリズムとの関連を推測できる。サイードによれば、オリエンタリズムは「オリエントを支配し、再構成し、威圧する

---

136) Harder, R., *Eigenart der Griechen*, a .a.O., S.51.

137) 「オリエントを発話させるのはヨーロッパである」(Said, Edward W.: *Orientalism*, New York 1978, p.57)。「学識ある西洋人は、あたかも都合の良い優位な位置から、受動的で未発達で女性的で、黙っていて怠惰ですらある東のあり方を指摘し、それから秘密に満ちた秘教的な言語を明るみに出す能力に由来する文献学者の学問的権威の下にオリエントに自らの秘密を打ち明けさせ、ついに東を発話させる」(Op.cit, pp.137-138)。「オリエンタリストだけがオリエントを解釈することができ、オリエントは自らを解釈することが徹底的に不可能である」(Op.cit, p.289)。

138) Op.cit, p.328.

139) 孫歌「竹内好に学ぶこと」(<http://takeuchi-yoshimi.holy.jp/special/sonka.html>)

140) 注117を参照。

欧米のやり方<sup>141)</sup>であり、「全てのオリエンタリストは、自らの経歴を文献学者として始めた」<sup>142)</sup>。

1952年ハルダーはミュンスター大学へ赴任し、社会復帰を果たす。その翌年に著された「古代ギリシア人の世界公共性」は、「ヨーロッパの連帯感と近代の世論にとって世界標準となったヘレニズムの普遍的な人間性は、自らの内的な力を古代ギリシアの宗教から汲み出した」<sup>143)</sup>ことを説いている。この論文においては、以下の二つの点が興味深い。

第一に、ハルダーがヴァイマル共和国下の自らの研究において主題化しながらも、第三帝国下ではほぼ黙して語られなかった人間性（Menschlichkeit, humanitas）が、再び語られ始めていることである。彼は前三世紀のギリシアの地理学者エラトステネスの言葉を引く。

「諸民族をギリシア人か異邦人かによってではなく、<sup>アレテー カキアー</sup>有能か無能か、内的な価値および業績によって区別すべきである。いわゆる異邦人の中にはインド人、ローマ人、イラン人、カルタゴ人が含まれる。彼らは驚嘆に値する国家秩序、生の秩序を所有する。（中略）エラトステネスにおいて諸民族は、その深い共約不可能性にもかかわらず、もはや（アレクサンダー大王の）後継者の政策におけるように自らの同化能力によってではなく、自らの価値、自らの人間性に従って測られる。<sup>アレテー カキアー</sup>有能か無能かという価値規範に関して言えば、それは純粋にギリシア的である。しかしそれは国民的でギリシア的な色彩を取り去られ、人間的に本質的なものへと還元されたので、国民を超えて適用可能となった。（中略）（諸民族の）一致は<sup>アレテー</sup>有能性、つまり本来の人間的なものに向けられている。なぜなら人間性、フマニタスという概念がこのような（人類の統一という）精神的な空間に属するのは、明らかだからである。まさにこうした人間的な<sup>アレテー</sup>有能性は価値評価の基準であり、（その）審査員はギリシアの教養の担い手である。」<sup>144)</sup>

ヴァイマル共和国下のハルダーは、人間性をローマのスキピオ・サークル、キケロ、将軍による「寛恕、雅量、労わり、穏和さ、鷹揚さ、寛大」<sup>145)</sup>などとして理解していた。ところが上の引用における人間性は、ヘレニズムにおける<sup>アレテー</sup>「有能性、内的な価値および業績」として理解されている。後者の<sup>アレテー</sup>「有能性、業績」としての人間性の理解は、<sup>フマニタス</sup>ドイツ連邦共和国にも次第に浸透しつつあった、第二次世界大戦後のアメリカを中心とする自由主義世界の価値観を想起させる。

第二に、ハルダーは古代ギリシア人の世界公共性を論じる際、古代ギリシアで発展した世界公共

141) Said, E.: op.cit, p.3.

142) Op.cit, p.98

143) Harder, Richard: Weltöffentlichkeit bei den alten Griechen, in: Kleine Schriften, a.a.O., S.56.

144) A.a.O., S.47-49.

145) 注19、注127を参照。

性と古代オリエントの普遍主義を区別している。両者の相違は、本来の公共性の有無に留まらないという<sup>146)</sup>。「ペルシアの世界理念は自らの境界内にあり、ギリシアの世界理念は自らの境界外にある。前者は自らの国と帝国を世界と素朴にも同一視する。(中略)オリエントの素朴な普遍主義は環境を自らの世界へ引き入れ、ギリシア人は自らの圏域から外へ歩み出て環境を外部に求める。」<sup>147)</sup>このような世界に関する二つの見方の対置は、冷戦体制下の東西世界の対立を連想させる。

以上「ギリシア人の固有性」「ギリシア文化入門」「古代ギリシア人の世界公共性」を手がかりに、第二次世界大戦後のハルダーによる研究の軌跡を辿った。これらの作品は、彼による過去の研究の集大成であっただけではない。その中には第三帝国下の自らの言行の修正（非明示的ないしは明示的な、人間性の再評価）、第二次世界大戦後の世界情勢への適合と思われる試みが含まれていた。マンフレット・ラントフェスター（Manfred Landfester）は第二次世界大戦直後のドイツ連邦共和国における古典研究の特徴として、「脱国民化」「脱政治化」を挙げている<sup>148)</sup>。ハルダーの当時の古典研究は、こうした同時代の傾向に沿っていた。

第二次世界大戦後から死に至るまでのハルダーについて、彼の周辺の人物による証言が残されている。哲学者のハンナー・アーレント（Hannah Arendt）は1924年ベルリンでハルダーからギリシア語を習い、1956年に彼と再会した<sup>149)</sup>。再会の模様を記す彼女の書簡によれば、ハルダーは「(中略)きわめて閉鎖的で、明らかにすでに長いこと自分自身を計画的に罰することと携わっていた」<sup>150)</sup>という。ハルダーがなぜ自分自身を罰していたか知る手がかりを与えるのは、アーレントの友人で、ミュンスター大学でハルダーの同僚となったドイツ文学者ベンノ・フォン・ヴィーゼ（Benno von Wiese）による以下の証言である。「ハルダーは無制限に悔いる能力を持つ類まれな人に属したと私は思う。(中略)前半生において、何かしら不気味にも情熱と矛盾に駆り立てられたりヒャルト・ハルダーは、苦痛と、ようやく得た静かな憂愁な快活さによって、変化した人として亡くなった」<sup>151)</sup>。

上で観察された第二次世界大戦後のハルダーの性格付けから彷彿してくるのは、古代ギリシア悲劇の登場人物オイディプス王である。オイディプス王は、自らの意図に反して人道に悖る行為（父の殺害、母との結婚）に至ってしまう。そしてその責任を取るため、目を抉り、ギリシア中を放浪

---

146) Harder, R.: Weltöffentlichkeit bei den alten Griechen, a.a.O., S.53.

147) A.a.O..

148) Landfester, Manfred: Geistiger Wiederaufbau Deutschlands durch die humanistische Erinnerungskultur nach 1945, in: Gießener Universitätsblätter, Jg.33, 2000, S.81f.

149) Schott, G.: a.a.O., S.419f.

150) Arendt, Hannah/Blücher, Heinrich: Briefe 1936-1968, hrsg.v.Lotte Köhler, München 1996, S.453.

151) Wiese, Benno von: Ich erzähle mein Leben, Frankfurt am Main 1982, S.227.

する。死の直前の彼の、運命を受け入れ浄化された姿は「コロノスのオイディプス」に描かれている。他方ハルダーは多くの人に先駆けてナチスの問題性を見抜いたにもかかわらず、「精神史研究所」に赴任する。そして研究面、治安面でのナチズムとの協調に至り、人道に悖る行為に間接的に加担した。第二次世界大戦後にはそれを悔い、自らを罰し、オイディプス王と同様、誰にも看取られることなく孤独な死を迎えた。奇しくもハルダーは死の前年の1956年の夏学期、週3回にわたってオイディプス王に関する講義をミュンスター大学において開いている<sup>152)</sup>。

## 結語

以上ハルダーの出自と経歴について整理を行い（第一章）、彼の研究上のテーマと関心について考察し（第二章）、彼によるナチズムとの関わり方の検討を行い（第三章）、第二次世界大戦後の彼について考究した（第四章）。最後にハルダーの思想の展開を、ヴァイマル共和国期、ナチズムの政権獲得、「精神史研究所」に関する活動、第二次世界大戦後という四つの時期に分け、まとめることとする。

ヴァイマル共和国期、ハルダーの主たる関心はプラトンやキケロを範として、哲学と政治、ギリシアの精神性とローマの国家性との人間性を介した媒介にあった。これは（哲学の）「現実政治との対立的な緊張関係」を孕んだ。こうした関心は、人文主義的な古典語教育・古典研究による同時代のドイツ国家・社会への寄与という、「第三の人文主義」の関心と密接に関わっていた。

ナチスの政権獲得に伴い、プラトンの哲学はハルダーによって人間性の一つの根源としてではなく、（当時、支配的であったように）人種主義的に解釈された。1930年代にハルダーが力を注いだプロティノス研究は、哲学やギリシアの精神性の純化と関わるもので、政治や（ローマの）国家性と関わるものではなかった。

「精神史研究所」に関する活動として、ハルダーが携わったインドゲルマン精神史は、ギリシアの精神性とローマの国家性との（人間性ではなく）人種を介した媒介を目指した。それは過去におけるインドゲルマンによる征服を範とした、第三帝国の同時代の侵略（の正当化）と関連した。ハルダーは「精神史研究所」へ赴任する際、古典研究による同時代のドイツ国家への寄与、それによる古典研究の維持に関心を抱いた。しかし人間性ではなく人種主義に基づく古典研究は維持するに値したのか、と問うことができたであろう。

第二次世界大戦後、ハルダーの関心は（「ギリシア人の固有性」「ギリシア文化入門」に見られたように）ギリシアの精神性へ戻り、（現実）政治や（ローマの）国家性には、ほぼ触れなくなった。これと関連して（冷戦体制、自由主義世界を背景とした）人間性、（ギリシアや西ヨーロッパを中

---

152) Westfälische Wilhelm-Universität Münster. Volersungsverzeichnis SS 1956, S.104.

心とした、侵略ではなく) 国際協調が語られ始めた。しかし政治から文化への表向きの撤退にもかかわらず、ギリシア・ヨーロッパのオリエントへの隠された支配構造 (オリエンタリズム) が認められた。

ハルダーによるヴァイマル共和国、第三帝国、ドイツ連邦共和国という異なる政体の下での身の処し方には、ある程度、共通点が窺われる。すなわち、体制側の立場から反体制側の言行を咎めることに加った (ヴァイマル共和国下でのナチ・ドイツ学生連盟の言行への批判、第三帝国下での「白バラ」配布文書の検分)。その後、体制の変化に伴って旧体制下での言行を批判されながらも (1933年のキール大学自由学生連盟の罷免要求、1945年の非ナチ化審査)、その後しばらく学問研究に沈潜し (ナチ政権の成立直後には、それへの賛同を表明する文章も発表)、復活を遂げた (「精神史研究所」、ミュンスター大学への赴任)。人間性という言葉は、その都度の体制に合わせて意味内容を変えるか、あるいはほぼ<sup>153)</sup> 使われなくなった。ホルクハイマーとアドルノが『啓蒙の弁証法』で言及し、批判した「適合能力に長けた、人間性の専門家」<sup>154)</sup> とは、ハルダーに当てはまったと言えよう。こういった意味でハルダーによるナチズムへの協調は、彼の人生における処世術の一つの表れであったのかもしれない。しかし、こうした彼の人生に「人間らしさ」を与えていると思われるのは、第二次世界大戦後の強い悔恨と悲劇的な最後である。

謝辞：本論文は、平成29年度科学研究費助成金 (基盤研究C、課題番号17K02265) による研究成果の一部として公表するものである。本論文を執筆するための資料収集の際、バイエルン州立図書館、ミュンスター大学資料館のお世話になった。この場を借りて、関係者の方に感謝を申し上げる。

---

153) 「人間性への補遺」は第三帝国期の1934年に刊行されている。しかし本論はプファイファーが1929年に刊行した論文への反論 (Harder, R.: Nachträgliches zu humanitas, a. a. O., S. 401f.) であり、ヴァイマル共和国期に著された可能性が高い。

154) Horkheimer, Max/Adorno, Theodor W.: Dialektik der Aufklärung. Philosophische Fragmente, in: Gesammelte Schriften, Bd.3, Frankfurt am Main 1981, S.11.